

---

# あの世

こめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの世

### 【Zコード】

Z8614B

### 【作者名】

こめ

### 【あらすじ】

ある日、横断歩道で車にはねられた男。  
目覚めてみると辺り一面なにもない世界。  
そこに神を名乗るオヤジと、なぜか二人のバーチャルガールも現れて…。

抱腹絶倒のドタバタ劇！

(多少下品なギャグもあります。下品なギャグが苦手な人は注意して下さい)

一人称で書かれていますが、作者はこんな人間ではありません。  
完全なフィクションです。

## 遭遇（前書き）

お気軽に評価のほどを。

## 遭遇

死んでしまった。実にあつけなく、一二十四才で死んでしまった。  
大音量のダンス・ミュージックが流れるCDプレイヤーのイヤホンを耳にさしてパチンコ店へ向かう途中、横断歩道で車にはねられたのである。

赤信号に気がついたのは後頭部をアスファルトの地面へしたたか強打して仰向けの状態、薄れいく意識の中でだ。

こんなんじゃ事故に遭うのも当然といえよう。不注意の自業自得。誰にも、文句はつけられない。

そして次に目覚めた時、俺は辺り一面真っ白な何もない所にいた。

ああ、死んでしまったんだなあと、思ったのである。

いや、確信したといったほうがいい。理由はこれといってないが、そつなのだから仕方ない。

無理矢理でかまわないのなら第一にこの田の前に広がる異常な光景と、第二に動物的本能であろう。

俺はとりあえず当てもなく歩き出した。これも正確には足が勝手に動き出した。

己の魂を引きつける強力な磁場へ向かうが如く。

どれくらい歩いただろう、距離も時間も何も分からぬがやがて前方に黄金色に発光する扉のようなものが見えてきた。

そこまで行つて俺はぽかんと大口をひろげ立ち止まる。

扉状のものの大きさは縦二メートルで横が七十センチといったところ。ノブはついていない。

使用目的が、不明である。後ろには何もない光景が広がっているのだ。

家の建築中ではなかろう。扉から作るわけがない。

まあ、だからといって別にどうでもいいことではある。他に何も

ないから仕方なく見てているだけだ。

と、とつぜん扉状のものがばたああああんと大きな音を立て開いた。

俺は喫驚仰天してひっくり返った。

奥のほうから「はやくなかに入つてこい」と、声がする。

「腰が抜けて、立ち上がれません」俺は目に涙を浮かべて言った。なぜか、敬語である。

「しようがない奴だ。おい、行つて連れてこい」扉の向こうの何者かがそう命令すると、金髪のバーニガールが一人飛び出してきた。「うわっ。な、何なんですか、あなたたち」俺は両脇をバーニガールの美女に支えられてどぎまぎした。

豊満な乳房が体に密着し、フェロモンを含んだ香りが鼻をくすぐる。本来なら嬉しいはずである。しかし、この異常な状況下だ。混乱してしまう。

どうして死後の世界にバーニガールがいるというのだ。不自然に過ぎる。そんな話、生前には一度も聞いたことがない。

もしかして俺は死んでいなくて、ここは地球上のどこかの場所なのか。

美女一人にずるずる引きずられながら、あれやこれやひたすらに考え続けた。

おかげでこの二人の美女に命令を下した者のところへ到着したことにも気づかなかつた。

「おい、何をひとりでぶつぶつ言つておる」

「どうやら、独り言を呴いていたらしい。」

「いえ、意味もないただの」申し開きしながら俺は顔をあげた。外と同じく真っ白な場所。四十がらみのオヤジがフンドシ一丁で寝転がっていた。

禿げ頭で、太鼓腹。周りに散乱した酒瓶から察するに多少酔つているのだろう。頬が、赤い。

「なぜ俺を呼んだ。てめえはいったい、何者だ。ここはどこだ」俺

はぶつきら棒に言い放つた。

心中、怒りがむらむらと込み上げてきた。こんなオヤジから偉そうに呼びつけられたくない。

「ここか」オヤジは欠伸しながら生返事をした。「ここは死後の世界。つまり、あの世じゃ」

「ひえええ」もしやと、淡い希望を持ち始めていた矢先である。俺はその場に泣きぐずれた。「やはり俺は、死んでしまったんだまあ」

「そうじやそうじや。おぬしは死んでしまった」俺を指さして何度も大きく頷く。

つづいて「わははははは」と、腹を抱えて大爆笑。

そこで俺は我に帰った。ひいひい言いながら地面を転げ回つているオヤジに詰め寄る。

「なんで、てめえにそんなことが分かる。ここがあの世だなんて証拠は何もないじゃないか」

オヤジは今だ笑いの発作が治まらないらしい。

「ああ、それはじやな」ひく、ひくと間欠的にしゃくり上げている。「おぬしが発した残りの質問に答えれば明らかとなるぞ」

「どういうことだ」俺は、もはやこのオヤジをぶん殴つてやりたい衝動に駆られていた。「納得のいく答えが返つてこなかつたら、承知しないぞ」

「まあ、落ち着け」オヤジは前に突き出した両の手で俺を制した。

「なぜ、ここがあの世であることが分かるかと」うと

「分かるか」というと、オウム返しに言つて、俺は「ぐりと唾を飲み込んだ。

「ワシが」オヤジは一瞬間を置いてから叫んだ。「神様だからじやあああ」

その勢いに気押されて俺は「ぎょろつ」などと意味不明な言語を思わず発し、またぞろ後ろにもんぞり打つてひっくり返り腰を抜かした。

オヤジは立ち上がり、そんな情けない俺の姿を悠然と見おろす。

「だからおぬしをここへ呼んだというわけじゃ」

「嘘だ」

「嘘ではない」オヤジの口調は断定的であり、しかも、真顔だ。有無をいわせぬ圧倒感が体から漂い出した。目の錯覚で、オヤジが何倍にもでかくなつたかのよう。先ほどのふざけた様子がまるでない。

そこには確かに人間離れしたものがある。

俺は、啞然とした。

「信じて貰えんかのう」

「なら、証拠を見させてくれ」喉の奥から言葉を絞り出す。

事故ったあとに目覚めた場所も場所だ。最初に確信した通り俺は死んでいて、そしてここはあの世で、もしかしたらこのオヤジが神様かもしねり。

「証拠、じやと」

「たとえば、ううううん、そうだなあ」俺は顎に手をやつて考えた。タネも仕掛けも出来ず、それでいて人間にはとても不可能なことを。「空中浮遊なんて、どうだ」パッと頭に閃いた。「今すぐに俺の目の前でやつてくれ。そうしたら信じる」

「なんじゅ。そんなことか。御安いご用よ」オヤジは首を左右に振つてぼきぼき鳴らし、両脇のバーチガールを払い退けた。「では、いくぞ」

体が、宙に浮く。

「おおおおっ」俺はのけぞりながら嘆声を上げた。

オヤジはみるみる上昇していき、ついには地上二十メートルほど位置へ到達。そこで座禅を組み、宙を右へ左へ滑らかに移動してみせる。

俺は、言葉もない。目が点だ。

そんな俺を見て気を良くしたのだろう、オヤジは両手足を広げたムササビのような格好でぐるぐるぐるぐる旋回までやり始めた。

急降下し地面ストレスまできてふたたび上昇。またぐるぐる回る  
なんて芸当も披露する始末だ。

「ここまでくると空中浮遊ではなく、飛行である。フンドシからは  
金玉がはみ出していた。

俺はびっくりして言った。「もういいから、降りてきてくれ」  
神様のくせに声が聞こえないらしく、オヤジは微妙な笑みをたた  
えたまま空中を飛び回り続いている。フンドシは完璧に緩み、局部  
が丸出しだ。

俺は、ぶちキレた。

「降りてこいと言つてるだろうがああああああ「みずからの鼓膜が  
破れんばかりの大聲で怒鳴つた。

オヤジははつとして上空から俺に顔を向けた。びつやう、今度は  
聞こえたらしい。

「おお。すまんすまん」ゆっくりと地上に降りてきた。「びつも何  
かをやり出すと夢中になつてしまつたでな」

ペロリと舌を出し、恥ずかし気に頭を搔いた。

こいつは九十九パーセント神様に違いない。俺の疑念は、ほ  
ぼ消え去つていた。

今、目の前にいるオヤジのしたことはどう考へても人間技ではな  
いからだ。少なくとも俺の知つている範囲内では空を飛ぶ奴なんて、  
ひとりもない。

しかし、逆に言ひ替へるとまだこのオヤジを百パーセント神様だ  
と認めたわけでもない。マジックの可能性を捨てきれないからだ。  
とてもそうは見えなかつたが、いちパーセントほどの疑惑は残る。  
俺はオヤジにもうひとつ無理難題をふっかけることにした。

「それじゃあ、次は俺を浮き上がらせてくれ。空中浮遊がしたい」  
これが出来れば、本物である。俺にはタネも仕掛けもされてない。  
本人が、いちばんよく分かつている。

「さあ、今すぐ頼む」

「よからう」

意外にもオヤジは即諾した。少々、ためらつたりすると思つていたのだ。

「では、いくぞ」しかつめらしい面持ちである。「心の準備はいいな」

うん、と返事をする前に俺は地上五十メートルほど位置に達した。それは浮かび上がるというよりも弾丸のように飛び上がったといつたほうがいい。なんせその勢いで服は所どころが裂け、あまりの空気圧に俺の顔は一瞬ひしゃげたくらいである。

失禁した。

「ありがとう。うん、もういい。降ろしてくれ」俺は哀願する。  
完璧に脱力してしまい、手足をだらりと垂らした状態だ。まるで張りつけにされた死体みたいなもの。なにも、楽しくない。

「聞いているのか。俺をここから」

オヤジは無邪気な笑顔で俺に手を振った。聞えていないのである。俺は、戦慄した。さああと音を立てて顔から血の気が引いていく。

1)の距離から蚊の鳴くよくな声が地上に届くわけがない。おそらくオヤジには俺が口をぱくぱく動かしていくことぐらいしか確認できないであろう。

だからといって今の俺にはこれが精一杯だ。やばい。

「お次は、例のやつをいくぞ」ラッパのかたちに重ねた両の手を口に当て、オヤジはバカでかい声でそう言った。

「それ俺に向かつて伸ばした腕をぐるんと回す。

その腕の動きに合わせて、俺の体もぐるんと大回転。

「あ、それそれ」オヤジは小躍りしながら腕を振り回しつづける。  
「ぎゃあああああ」俺はまばたきもせずに空中をマッシュの速さで

旋回した。

あまりの恐怖に体中の穴といつ穴がすべて開く。

もうダメだ。死ぬ。　　いつたい俺は何度死ねばいいのだらう。

それにしてもあるのオヤジは……。ここは……。

俺の頭の中をさまざまな想いが走馬灯のよつに駆け巡った。意識が、途切れ途切れになっていく。

## 対応

気がつくと、俺はいつの間にか地面に寝そべっていた。どのくらいこうしていたのだらう。

まだ、だいぶぼうとする頭。視界にあるものは、何だ。あまりにも近すぎる。

鼻のもげそうな加齢臭に中年男性の荒い息づかい。肌をさすのは無精髭。

そうだ、これはオヤジの顔面のアップだ。

——たちまち俺は正氣づいた。神と名乗るオヤジに人口呼吸をされていたのである。

「な、なにをしてるんだあああああ」 オヤジを下から突き飛ばし、口をぬぐう。「てめえ、このホモ野郎」

「痛たたたつ」 背中を地面に打ちつけたオヤジはバーニガールの一人に腕をひっぱられて、起き上がる。「神の慈悲も分からぬか。おぬしがあぶないと判断したからやつたまでのこと。けつして、趣味ではない」

「なら、その一人にさせればいいじゃないか」 俺はバーニガールに向かつて顎をしゃくつた。

「こやつらに、そんなスキルはない」 オヤジは四つん這いで俺に近寄つてくる。

酒のせいにしろ頬が赤いのは発情している様であり、しかも、金玉までモロ出しなのだ。四十オヤジのホモにしか見えない。

俺は、貞操の危機を感じた。

「うわあああ。く、くるなあ」 横座りの体勢あとじわる。

「なにをそんなんに、脅えておる」 唇をとがらせるオヤジ。すねているつもりなのか、接吻を求めているのか、俺には判別できない。

恐慌をきたして、声を張り上げた。「いやだいやだいやだ。男

には興味がない。女がいい。可愛娘ちゃんがいい。俺は、ノンケなんだ」

「ワシも、ノンケなんじやあ」オヤジは肥満体にあるまじき跳躍力でぴょんと跳ね上がった。

俺の眼前に豚の如き巨体。つづいて呼吸が止まりかけるほど強烈な衝撃。

「ぐほっ」九十キロはあらうかというオヤジに押し潰され、俺は白目を剥いた。

「やつ、しまつた。大丈夫か」オヤジは俺の肩を掴んでゆさぶる。

「かくなるうえは、責任を取って」

ふたたび唇をどがらせ顔を近づけてきた。

切れかけていた意識が、すぐに戻った。このオヤジと唇を重ねるのは死んでもイヤだ。

俺は力まかせにオヤジの下半身へ蹴りを入れる。

「ぶはっ」よほど的確にヒットしたのだ。今度はオヤジの方が白目を剥いた。

俺のかたわらで股間を押さえ、うずくまる。

オヤジの腰の辺りを叩いてやつたり、背中を擦つてやつたりするバーチガールたち。

「やつぱり、そういう趣味だったんだな」俺は立ち上がりながら罵倒した。「このホモオヤジめ」

「い、誤解じや」ふうううと切な気に息を吐いてオヤジは俺をふり仰いだ。「ワシのせいでおぬしが死んだら一大事。夢見も悪い。だから男と接吻なんぞしたくはないのを、我慢して」

「そうだ、二回ともお前のせいだ。そしてかららず自分で責任を取ろうとしたしやがる。唇で。だいいち、ここがあの世だと言ったのはお前じゃないか。なんで死ぬ道理がある。無茶苦茶だ。そのへんのところをぜんぶ説明しろ」

「わしは口べタなんじや」

「そんな言い逃れが通るわけないだろ」俺はオヤジの首を絞めた。

「説明しろ説明しろ説明しろ」

「つおつ。ぐぐぐつ」オヤジは手足をバタつかせる。アルコールが入っているもんだから顔はこれ以上ないといつぶらこに真っ赤かだ。「は、離さんか。これでは、説明、が」「いつそのことこのまま絞め殺してやろうかとも思った。が、俺はバーチャルの一人に服を掴まれあえなくオヤジから引き離されました。

まあ、これでよかつたのだろう。どのような説明をするのが、見ものである。それを聞かないうちは胸のもやもやが収まらない。

オヤジはほじほじと咳込んだ。

「なにから話せばいい」

「だから何で」

「おお。そうじゅつた、そうじゅつた」うえとオヤジはえずいた。

「空中浮遊と、おぬしを押し潰した件な。あれはワザとではない。粗相じや、粗相。むろん悪いのはワシのほう。すまん」

「そのあとの人口呼吸は、どうこういどだ」俺は声を荒げる。「ふざけているのか」

「違う。おぬしがあぶないと判断したからやつたまで。それは先ほども」

「他に方法はないのか」俺はオヤジが喋つていてる途中で地面をビスつと踏み鳴らした。「お前は神様なんだよな。そう自称したよな。だったら魔法みたいなものを使えばいい。なぜ、そうしない」

「あれがそうじや」オヤジは平然としたもの。「ワシの人口呼吸は蘇生率百パーセント。あれ以外に、方法はない

わお、と叫んで俺は飛び上がった。「じゃあ、ここがあの世だというのは何なんだ。嘘なのか」

「ワシが神様だから」オヤジは俺の理解力に少し呆れたといった感じで嘆息した。「ここはあの世に決まっておろづが」

「蘇生は生き返らせるつて意味だろ」俺は髪の毛を搔きむしむし。「ここがあの世なら、死ぬことはあるのか」

「ある」オヤジは言下に答えた。「実際おぬしは死にかけたではないか。身をもつて、知つたはず」

「ああ、死にかけたさ。たしかに死ぬと思ったよ」オヤジにひとさし指を突きつける。「じゃあ、死んだら俺はどこへ行くんだ」

「あの世じゃ」

「ここがあの世なんだろうが」

「そうじや。だから死んだら、またここへやつてくるんじや」

「へつ」俺は阿呆のように表情を弛緩させた。「死んだらあの世へ行く。だから、またここへやつてくるだつて」

「うむ」オヤジは目を閉じて大きく頷く。

「それはつまり俺が最初に目が覚めたといろぐ、つてことかなのかへなへなどその場に崩折れた。「そうなのか。答えろ」

オヤジを横目に、俺はかぶりを振った。

「いや。やつぱり答えなくていい。どうせそう答えるに、決まっている」ますます力が抜けていく。「事故ったあと、俺はあそこにいたし。そしてあんたが人口呼吸をした理由は俺を死なせないため、ね。神が不注意で人を殺すわけにもいかないだろうから。うんうん。蘇生率百パー セントの魔法の人口呼吸」

水平線の彼方をぼんやりと見つめた。

「理屈は、通つている。通つているよ。俺が馬鹿だった。何も分からなかつた。あひやひやひやひや」反論したくても反論のしようがない。なぜか俺は笑い出した。

笑いが止まらなかつた。笑いながらぼろぼろと涙をこぼした。

そんな俺の肩をオヤジが軽くぽんぽんと叩く。氣を使つてくれたに違いない。

オヤジは口を開いた。

「おぬしらの世界の尺度で」こを計るのはたいへんじや。ひとつひとつ覚えていけばよい」

「うんうん」俺は目頭を拭つた。

この涙は何の感情によるものなのかな自分でもわつぱり分からない。

バーニガールの一人もやつてきて、両側から俺の太股を叩き始めた。こっちの方は事務的である。能面とみまじづばかりの無表情。叩きかたも、雑だ。

「ありがとう。もう、なぐさめてくれ、な」くじっと、俺は目眩を起こした。

「どうした」すかさずオヤジは心配そうに額をとがらせる。

俺の腹がぐううと鳴った。

「考へてもみたら、長いこと食事にありついていい。死ぬ前の日にインスタントラーメンを食つたきりだ。やたらと体も動かしたし、腹と背中がくつついちまう。ごちそうしてくれ」

「じゅそつ、とな」

「ああ。さつき責任を取つてくれるとか言つていたが、その代わりに飯を腹いっぱい食わせてくれるだけでいい」

「なんじゃとう」オヤジは片方の眉を吊り上げて額にシワを刻んだ険しい顔で仁王立ちとなつた。頬がぴくぴくと痙攣する。

これはマズい。オヤジの首を絞めた直後に図々し過ぎたか。そう思い、俺は大慌てで訂正した。

「いや、できればってことなんだ。できればって。そうして貰えたら、うれしいかな、なんて」

「ふんぬばら」と、オヤジは右腕を振りかざした。

「ひやつ」俺は頭を抱え込んだ。ぶん殴られるのを覚悟した。

が、オヤジは俺とまるであさってな方向に体をひねり、指をパチンと弾く。「そこにいでよ、キッチン」

腕を伸ばした先にぼわんと白煙が立ち昇る。

「おおおっ」俺はぶつたまげた。

なんとそこには周りと同化するような真っ白い長方形の建物が現れているではないか。これこそイメージ通りの魔法だ。

オヤジは俺に満面の笑みを向けた。

「腹がへっているならへっているで、なぜもつとはやく言わん。もう、いやねえ」

なぜか少しオカマキャラになつている。これはたぶんギャグのつもりなのだろう。どつちみち気持ちの悪いことに、変わりはない。

俺はオヤジにたずねてみる。

「キッチンと叫んだように聞こえたが、あれは、もしかして……」「」明答 オヤジはウインクした。「楽しみに待つておれ。主婦の意地にかけて、ぜつたい満足させるわ」

いそいそとキッチンの中へ入つて行つた。

バーニガールの一人がぱちぱちと拍手を送つている。やがて、油の投入された中華鍋をあやつるような音。

俺はバーニガールに話しかけた。

「なあ、あんたらはいつたい何なんだ。あのオヤジが神様だとしても、あんたらの存在意義というか正体というか、それがいまいちよく分からぬ。召使みたいなものなのかな。現世でバーニガールをやつしていく、あのオヤジに気に入られたとか」

料理が出来るまでの暇潰しと、最初からの疑問である。

バーニガールの一人はそろつて俺に顔を向けた。相変わらずの無表情。質問に答える気配すらない。

「まさか、あんたらも神様じゃないよな。女神様」俺はことさら軽薄な調子で喋り続ける。このほうが彼女らも取つ付きやすいだろう

との計算からだ。「いや、発想の転換で悪魔つてことも。なんてね。あはははは。あつ」

俺は自分の発した言葉にぞっとした。なんてことだ、今の今まで考えもしなかつた。その可能性もあつたのだ。

俺は重い腰をあげてバーニーガールたちに歩み寄る。

「尻を見せる。悪魔なら先のどがつた黒いシッポが付いているはず。いやらしい気持ちからではない。確認だ」

まさに脱兎の勢いでバーニーガールの二人は逃げ出した。

元が人間の女なら、今日会つたばかりの男に尻を見せるわけがない。悪魔なら悪魔で正体を知られたくないだろうし、女神様にしあつて威厳がまる潰れだ。

どつちにしたつて逃げ出すに決まっている。

俺は追いかけた。

「尻を見せる尻を見せる尻を見せる」

客観的には変態そのものであろう。しかしここは死後の世界。なにかまうものか。

俺とバーニーガールたちはキッチンの周りをぐるぐる、ぐるぐる駆け続けた。

体調が万全なら女の足なんかに負けやしない。すぐに捕まえられたはずである。

が、俺は空腹状態。差は開き、バーニーガールたちの姿が角に消えた。

「くそぅ」またしても眩暈を起こして、俺は地面上に膝をつく。「逃げられちまつた」

くやしくて歯がみした。——その瞬間である。俺はどんと後ろから衝撃を受けて突つ伏した。

「痛ててて」振り返ると、そこにはバーニーガールの一人も倒れている。

俺もバーニーガールたちも気づかなかつたのだ。一週遅れである。

「このやうう」俺はバーニーガールのひとりに踊りかかつて行つた。

足を捕え、レオタードに手を伸ばす。

それを必死に打ち払うバーニガール。

もうひとりが立ち上がり、仲間を助けるべく俺にビンタの雨をく  
れる。「こり、無駄な抵抗はするな。尻だ。素直に尻を見せる。尻

尻尻」俺は尻を連呼した。

と、キツチンのドアががちゃりと開いて、オヤジが顔をのぞかせ  
る。額には玉の汗。

「なんじゃ。騒ぎつしい」

「尻だ尻だ尻だ、尻」

オヤジに一警をくれたのが間違いの元だ。暴れるバーニガールの  
蹴りが俺のみぞおちに入った。

「ふはっ」急所である。息が詰まって俺は失神しかけた。  
体をくの字に曲げたまま動けやしない。

バーニガールの一人はオヤジの背後へと隠れてしまった。

「あの世にきてまでセクハラか」オヤジは憐れみに満ちた様子で頭  
を震る。

「ちがう」俺は脳髄まで痺れるような痛みに堪えながら、否定した。  
「あんたらの正体を確かめようとしたんだ」

「正体、とな」

「ああ、そうだ。もしかしたらあんたらは悪魔かも知れない。尻に  
黒いシッポが」

「ほれ」と、オヤジはフンドシをずり下げ、尻をこちらへ向かつて  
突き出した。

発疹だらけで薄毛の生えたそこは汚いことを除けばいたつて普通。  
シッポなんて、ついていない。

オヤジはフンドシを締め直しながらぶちぶちと陰毛を引っこ抜く。  
「疑いは晴れたじやろ」指でつまんだそれをふと吹いた。「そも  
そもシッポ云々のその発想なら、影を見れば済むことではないか  
「影、だつて」俺はオヤジの陰毛を避けながらきき返す。  
「そうじや。悪魔がうまく化けていても影が正体を」

「あっ」と短く叫んで、俺はオヤジとバーバーガールたちの影に視線をやつた。

オヤジはオヤジの影であり、バーもバーでそのままだ。

オヤジは溜め息をもらした。

「だいいち、悪魔とは神の元を追放されて地に墮ちた天使のことをいう。つまりは墮天使。現世に災いをもたらしたり、人間をそそかしたりするのが奴らの役目じゃ。魂と引き換えに願いを叶える、なんて話は聞いたことがあるう。死んでしまったおぬしの前に現れて、なんの意味がある」

冷静になつてみれば、オヤジの指摘通りである。

俺はテレ笑いした。「あはははは。やはり俺は馬鹿だな。軽率に過ぎた。すまんすまん」

「もう少しで料理は出来るはずじや」オヤジは邪魔臭そうに手で追い払う仕草をする。「あつちで待つておれ」

ふたたびキッキンの中へと入つてドアを閉める。

まったくもつとして、とんでもないところを見られたものだ。神と名乗るオヤジに。

俺は慚愧の念とともに元の場所へと戻つて行つた。  
かなりの間隔を置いて隣りに腰をおろしたバーニガールたちに対してもひじょうに気まずい。

後先考えずあんな行為に及ぶべきではなかつたのだ。俺は。

本当に俺は俺は、俺は。「うおおおつ」

頭を抱え込んで絶叫すると、バーニガールの二人が体をびくりとさせた。

座つたまま俺から遠ざかつて行く。また、尻の確認を迫られると思つたに違ひない。

「もうあんなことはしないから、しないから」俺は掌を立てて横に振つた。

バーニガールの二人はじつとこちらを伺つてゐる。すぐにも逃げられる体勢を取つてゐるのだろう。背を丸めていた。

「なんだ、信用してないのか」俺は今しがたの自分の行為を棚に上げ、少しばかりいらつとした。「いいから、もつとこっちへ座れ」地面をぽんぽんと叩く。

とたんに、バーニガールの二人は半転して斜めにぴょんと跳躍した。金髪をなびかせ、三メートルほど先に着地する。

そして警戒心むき出しのあの体勢。

俺も同じく飛び上がつた。「逃げんな、『ごらあ』

無言で目を見開き駆け出すバーニガールたち。

俺は四肢を地面へついてから勢いよく立ち上がり、そのまま足をもつれさせてぶつ倒れた。「うおつ」「

もう、起き上がる気力もない。

遠くバーーガールの一人が肩を寄せ合って俺を注視している。

コントそのものだ。きゅうに、アホらしくなってきた。

俺は側臥してキッチンを眺める。

オヤジがあの中へ入つてからどのくらい経つのだろう、そう思つた。一度外へ出てきはしたもの、かなりの時間をあそこで過ごしている。

俺はただ待つていただけではない。それ以外にもバーガールたちといろいろ悶着を起こしたりもした。

腹がへつていると料理が出来るまでの時間がやたらと長く感じるあの錯覚などではない。断じて、ない。

オヤジはいつたい何を作つているのだ。

「その前に」と、俺は声に出した。「なぜあのオヤジはキッチンなんかを出現させたんだ。初めから料理を魔法で出せばいいことではないか」

謎である。答はオヤジにしか分からない。

「ちょくせつきいてみるか。料理がどのくらいまで進んでいるのか、氣にもなるし」ううううと歯をくいしばりてゆっくり起き上がった。

同時に、キッチンのドアが開いてオヤジが湯気の昇る皿を片手に小走りでやってくる。

「すまんすまん、待たせたな」皿を前に差し出した。

「なんだ、これは」しかし出来上がりた料理を皿の前に、俺は慄然とした。

「カレーライスに決つておるうが」

「量のことをいつてるんだ。量のことを」その中型サイズの皿には真ん中にちょこんとライスが盛られており、もうしわけ程度にカレーが掛かっている。固形の具は何ひとつ入っていない。福神漬けすらない。これでどうやって腹を満たせばいいのだろう。無理だ。

「いつしじうけんめい作つたんだがなあ」オヤジはフンドシの端をめぐり上げ、流れる顔の汗を拭つた。「やはりこれだけでは、不満

か

「当たり前だ」俺は喚いた。「いつたい今まで何をやつていたんだ。たつたそれっぽっちを作るのに、こんな長い時間が必要なのか。嫌がらせか」

「違う。嫌がらせなどではない。ワシはおぬしのためにと料理をオヤジが必死に弁明しているそばから皿をぶん取つて、俺はスプーン五口でカレーライスを完食した。

「言い訳はいらない。また、作つてこい」オヤジに皿を押しつける。「飯を腹いっぱい食わせてくれるんだろ。そういうことだったよな。まさか神様が嘘をついたりはしないよな」

「ううううむ」オヤジは低くうめいた。「調子が悪いのだが。いや、調子が良いというべきなのか、とにかくもう一度トライしてみる。神の威信にかけて。待つておれ」

オヤジはわけの分らないことを言い残し、キッチンへと引き返して行つた。

「まあ、さつきよりはマシになつたな。少しは腹に入れて元気が出た」俺はうううんと伸びをしながらバーニガールたちへ顔を向けてみた。

俺の視線に気がついたらしい。バーニガールの一人も俺に顔を向ける。

「なあ、頼むからそんな遠くに行かないでくれよ。疎外感を覚えちやうなあ。さみしいなあ」俺は舌なめずりしてバーニガールたちへと接近して行く。「お前たちはバーニガールなんだろ。そうなんだろ。俺は客みたいなもんじやないか。優しくといふか、サービスというか、お酌のひとつも」

そうだ、と俺は膝を叩いた。「あのオヤジにねだつてビールの一本でもつけてもらおう。さんざんな目に合わされたんだ。そのくらいはOKしてくれるはず」

進行方向をキッチンへと変える。

## 発狂

「尻の件は水に流して、仲良くしようぜ。一杯やりながら」「俺は軽蔑のしかめ面をしているバーーガールたちへ投げキッスをし、ノックもしないでドアを開けた。「おおおおい、神様あ。ついでによく冷えたビールを一本めぐん」

中華鍋を火にかけたガス・コンロの近く、下半身を丸出しにして皿の上へ屈んでいたオヤジと目が合つた。

「なぬ、ビールとな」口を開いた拍子に肛門から下痢便がぶりばりしゃあああああああつと大噴出した。皿の縁からぼたぼた溢れ落ちる。オヤジは立ち上がり自分の陰茎をわしづんだ。

「それなら楽勝、楽勝。いくらでも出る」水切り棚の銀のボウルを取るやいなやそこへ小便をじょぱああああああつと大量放出し、得意顔で俺に手渡す。「何杯でもおかわりしてよいぞ」

俺はボウルを壁にぶん投げた。

「ふぎやあああつ」「奇声を発しながら収納庫を蹴飛ばし、カウンター・トップのマナ板を横払い、ラックの皿は全部まとめて床で叩き割つた。

俺はウンコを食わされていたのである。そして今度は小便を飲まされかけた。発狂寸前だ。

「ふうばがうげつ」と、咆哮さながらの声を上げてオヤジに体当たりする。

「ふぼつ」オヤジは鼻腔をおっぴろげてロッカーに激突した。

「くそくそくそくそ。糞を食わせやがつて。くそくそくそ」「俺は半狂乱で手当たりしだいに茶碗だの割り箸だの調味料だの何だのを投げつける。

「ま、また。落ち着け。ワシがいつ大便をおぬしに食わせたというのじゃ。言い掛かりじゃ」「片腕で防御しつつ、オヤジも空き手を使い床の品々を投げ返して応酬する。

「「」に及んでも、言い逃れをするのか」はあはあと肩で息をしながらオヤジを見んだ。

今さらになつてうえつと、嘔吐感が込み上げてきた。

「言ひ逃れなどではない」憤然としてオヤジは割れた皿に広がる排泄物を指差した。「おぬしに食わせたやつも、「」にあるやつもれつきとしたカレーライスじや」

「お前の肛門から出てくるところを目撃したんだ」

「その認識 자체が、間違つているんじや」

「なんだつてえ」俺は素頓狂な声で眉をひそめる。

「いいか、よく聞け。肛門から出でるのが大便なのは、おぬしらの世界のこと」オヤジは人差し指を立てて横に振つた。「しかしここでは、つまり神の作る料理とは「」という物なのじや。立派な料理なのじや」

「ではさつき、俺がまた料理を作るよう命令したら調子が悪いとか良いとか言つていたのは何だつたんだ」

「だからあれは」オヤジは面倒くさ氣に耳朵をぱりぱり搔いた。「なかなか便意を催さないという意味であつて」

「やつぱりウンコじやねえか、この野郎」俺はオヤジの頬をつねつて、力まかせに引っ張つた。「てめえてめえ」

「ひがあああう」オヤジは俺を突き離す。「便意を催しても便などたれん。料理じや。ワシの体の中で料理が出来上がるのじや」

「それを料理と呼べるもんか」もう誤魔化されはしない。このオヤジの「」じつけをいちいち認めていつたら、俺はオモチャにされるだけだ。「」三歩後ろによろめいて、すぐに反論する。「便意を催して肛門から出るのは大便だ。ウンコだ。それ以外の何ものでもない」「食つてそう感じたのか。感じなかつたろう。カレーの味しかしなかつたはずじや」

「カレー味のウンコじやないと、なぜ言い切れる」

水掛け論の様相を呈してきた。

俺とオヤジは額を密着させて睨み合つ。ふううう、ふうううと互

いの鼻息は荒い。

「なら、食うな」オヤジは駄々つ子のよつこむくれて、ふいつとそつぽを向いた。

「せがまれたつて食うもんか。ウンコのカレーを食う奴がどこの世界にいるというのだ」俺は唾を飛ばしながらわめいた。「他の物を作れ

「他の物、じゅと」

「飯を腹いっぱい食わせて貰えるはずがウンコだつたんだ。納得できるわけがない。ちゃんとした物を作れ」

「ならば、ハヤシライスなんてどうじゅ」

「液体以外の物を、つ、く、れ」俺は語句をひとつひとつ強調して言つてやつた。

「液体以外の物か。ううううん」オヤジはうつ向き加減に考え込んだ。「ならば、あれにしよう」

ガスコンロの中華鍋をシンクへどかし、下の引き出しから土鍋を取り出すと火にかける。

どのような料理を作るつもりなのだろう。なんにしろ飯を腹いっぱい食わせて貰つた後はウンコカレーの復讐をしなければならない。ぶつ殺してやる。

そう固い決意のもと俺が見ているそばからオヤジは肛門を床へ近づけて、めりめり黒い物体をひり出した。

「ハンバーグじゅ」手づかみで排泄物を俺の口元へ持つてきた。

「死ねえええ」俺はオヤジに殴りかかっていった。

「わつ」オヤジは頭を下げて攻撃をかわし、俺のかたわらをすり抜ける。「な、なんじや突然。おぬしが所望した通りの料理ではないか。気でも狂つたか」

「それもウンコだ。固形のウンコだ。ウンコだウンコだ」出入り口のところにバーニーガールの一人が鼻をつまんで立っていた。

「そいつらを見る。そいつらだってウンコだといっているようなもんじやないか」

「臭いがキツいのは床で混ざり合っている調味料のせい。おぬしが悪い」

「くふんと頷くバーニーガールの一人。なぜコイツらは頑ななまでにひとことも発しようとしているのだろう。よけいにイラッとする。「なんだとう。あくまでもウンコじやないと言い張るつもりか。ならばそれを」俺はオヤジの握っている固形の排泄物を顎でさした。

「自分で食つてみろ」

「こんなもの、食えるかあ」オヤジは排泄物を床に叩き付けた。俺はカウンター・トップの出刃包丁を手に取った。

「早とちりをするでない」オヤジが慌てて説明していく。「ワシは物を食わんのだ。摂取するのはアルコールのみ」

「じゃあ、そいつらに食わせてみろ」俺は包丁の切っ先をバーニーガールたちに向ける。

「こやつらに至っては食べ物どころか、アルコールさえも口にせん。何も摂らん」

バーニーガールの二人は鼻をつまんだままオヤジの排泄物をじっと見つめている。いかにも汚い物を見る目付きだ。それをウンコと認識しているようにしか思えない。

「よし、分かつた」俺は出刃包丁を中段に構える。「言い残すことではないな」

「さ、刺す気か。本氣でワシを」オヤジは面食らつたようだ。

「ああ、そうだ。何も言い残すことがないのなら」

俺がでっぷりと肥えたその醜い腹に狙いを定め、一步踏み出すやいなやオヤジは威喝した。「それは飯を食う気もないと受け取つていいのじやな」

「もういい。いらん。食わん。殺す」お前とは何も話す気はないのだといつアピールの意味を込め、片言の単語のみを並べて言つてやつた。

「そうか。飯は食わんか」オヤジは薄ら笑いを浮かべる。「ならばおぬし、餓死するぞ」

「死んだって最初のところに戻るだけじゃないか」俺は包丁でその方角をさす。「今より状況が悪くなることはない。もう、喋るな。うるさい」

「餓死は、苦しいぞ」オヤジは口の周りをべろりと舐め回し、サディスティックに瞳を輝かせた。「しかも死んだ後に目覚めても腹は満たされておらん。空腹のままじや。また苦しみながら死んでいく。永遠に、餓死は続くのじや」

「なにつ」俺は目を見開いた。

なんてことだ。そういうふうになるとは夢想だにしていなかつた。死んでも元の状態には戻らないのか。だったら今より悪い。

前の状態を引き継いで苦しみ続けるのは、まっぴら「メンである。

「やっぱり飯を食わせろ」俺はあっさりと翻意した。

「ならば」オヤジは掌を差し出してきた。「その包丁をこいつちへ寄越さんか」

俺は自分の握り締めている出刃包丁に手をやつた。

これを持ったままだとオヤジは料理を作ってくれないのでひづ。料理を作った直後はずぶりとやられたら、たまらない。

いや、それ以前の問題としてこのオヤジが神なら死ぬ」とはあり

得るのだろうか。死ぬかも知れないし、死なないのかも知れない。  
まあ、どっちにしろこのような凶器はあまり役に立たない。

死んだつてあの場所に甦るだけなのだ。目的は苦痛を「えらぶ」と  
のみになる。撲殺のほうが効果的だ。

それに包丁を寄越せとの要求は、今度こそまともな料理を作る意  
思表示なのだろう。

俺は長考したすえオヤジに従つこととした。

「ほらよ」出刃包丁の柄の部分を掌に置いてやつた。

「うむ。よろしい」オヤジはシンクの排水口に角から突き刺さつて  
いるマナ板を引き抜き、包丁とともに水洗いしてカウンターへと並  
べた。

そして壁のフックに掛けてあつたフライパンを空いている方のガ  
スコンロで火にかける。

フンドシをずり下げ屈み込んだ。

「さて、何が食いたい」

かつと頭に血がのぼつて俺は一瞬目の前が真っ暗になつた。

「その鍋だのフライパンだのマナ板だの包丁だのには、いつたい何  
の意味があるのかな。さつきから」必死に平静沈着を取り繕ろう。  
「料理を作るのに必要なのじや」オヤジはきょとんとした顔で瞬き  
をした。「当然じやろう」

「使つてないよな、それを。『せんせん』だんだんと声に怒氣が帯び  
てくる。爆発間近だ。「その、神の、料理法、じや」

「だから鍋やフライパンを火にかけ、マナ板と包丁を所定の位置に  
セッティングして初めてワシの体の中で料理が出来上がる仕組みな  
のじや」

「すううう、はああと俺は深呼吸をした。目を閉じて胸を押さえ、  
氣を静める。

「米はどうある」キッチンの中をぐるりと見回した。

炊飯器や米櫃の類が、どこにもない。

「カレーとハンバーグと、それとあと」指折り数えてメニューを並べ立てるオヤジ。

俺は頬のぴくぴく痙攣する作り笑いをオヤジに向けた。

「オカズはいらない。米だけで、じゅうぶんだ」

「なんとな。おぬしがごちそうを望んだのではないか」オヤジは責めるように言つてきた。

「俺にとつては白いおまんまが何よりのごちそうなんだ。オニギリにする。塩ふつて食つ」

「ならば、最初からそう注文すればよかつたのだ。ムダに疲れさせおつてからに」オヤジはふくれ面をして屈んだまま半回転し、尻を高くもたげてそこに点在する赤いぶつぶつを指でつまんだ。「ほれ、好きなだけ食え」

「ぶちゅぶちゅぶちゅ」と次々に白い膿が押し出されてくる。大きさは米粒と同じくらいで、形もそっくりで。

「ひやあ」俺は悲鳴を上げて嘔吐した。「うげえええええつ」

米はオヤジの膿だつたのである。膿にウンコを掛けたカレーライス。想像を絶するゲテモノ料理。

「これは胃の内容物をせんぶ吐いても吐き気は収まらない。俺は隅の『ミニ箱に顔を突っ込んでげえげえ言い続けた。

ビニール袋の底に溜まつた胃液の臭いがつんと鼻をついてくる。気分が悪い。しかし、何も食わなきゃ俺は死んでしまうのだ。餓死の連續で永遠に苦しみ続けることになるのだ。

後ろで心配そうに立っていたオヤジとバニーガールの二人をかき分けて、俺はガス・コンロの近くまで行つた。

床にはオヤジに投げつけた皿だの調味料だの何だのが広がつてい

る。マヨネーズと醤油とサラダ油が混ざり合っているところは、幸いウンコ膿カレーに侵蝕されていない。

俺はそれを両掌ですくつてべろべろ舐めた。「うえつ」「うえつ」

またしても嘔吐感が込み上げてきた。が、そんなこととなるものか。両掌の調味料をぜんぶ口の中へ入れて水道水で胃に流し込んだ。

ものも言わずに俺を田で追つているオヤジとバーチガール一人の横を通り過ぎ、キッチンの外へ出る。

「おい、どこへ行くつもりじゃ」

キッチンとあの黄金色の扉のちょうど辺りで、背中にオヤジの声が飛んできた。

俺は後ろ手を振った。

「おい、答えんか」オヤジはしつこい。延々ときいてくる。「答えんか。答えんか。答えんか」

「帰るんだよ」俺は立ち止まって振り返った。

「どこへじや」

「元いた世界へだ。最初に目覚めた場所、あそこへ行けば帰れるかも知れん。何かしらヒントが得られるはず。もう、こんなところにはいたくない。お前らといっしょにいるのは懲りゴリだ」

ふたたび歩き出した。

「おい、待て。待たんか」またオヤジの声が飛んでくる。狼狽えた調子だ。「お前ら、あいつを捕まえる。捕まえてこい」

ペたペたと、足音が近付いてくる。明らかにバーチガールたちのものだ。

俺はクルリと半分回って大股開きに静止した。

爪を立てて両の腕を振りかざし「がおおおつ」と、歯を剥いてみる。

びくつとしてバーチガールの一人は固まつた。効果できめんである。これまでの経緯で俺に対する恐怖心が植えつけられているのだ。

二人は青白い顔を見合わせる。

「何をしておるのだ。追いかける。捕まえる」  
バニー・ガールたちはオヤジと俺を交互に見やる。まじまじしてい  
るばかりで、いつこうに追いかけてくる様子がない。  
「へつ」と、俺は嘲笑した。

扉は目前だ。いつの間に閉まつたのだろう。足を速めた。

「ふんぬばら」と、オヤジの叫び声。パチンと指を弾く音がある。「地面よ、取りモチになれ」

「うわっ」右足の踵が上がらぬまま踏み出した左足も地面にくついて、両膝、両手の順に崩折れた。ベチョッと、ねばねばの触感。犬のような格好で動けやしない。地面が強力な粘着性の糊になっている。あの魔法だ。

「くそう。てめえ何をしやがる。はやくこれを」「俺はめいにっぽい首を後ろへねじ曲げた。「どうにか、し」

オヤジとバーニガールたちも地面に倒れていた。三人とも顔だけこっちへ向けてうつぶせに真っ直ぐ体を伸している。川の字だ。

オヤジはばつが悪そうに言つ。「助けて」

「お前もかあああ」両の手足が地面に固着していなければいちメートルほどは飛び上がつていたに違いない。俺の背中がぞくんと突き上がつた。「ま、魔法で取りモチを消せ。地面を元に戻せ」

「無理じや。手が動かせない。指をぱちんと弾けない」

「なんだつてえ。あれは指を弾かないと出来ないことなのか」

オヤジは俺の質問に答えず遠い目をした。

「ワシら、このまま死んでいくんじやなあ」

「なんで地面をぜんぶ取りモチなんかにしたんだ。自滅じやないか。馬鹿かお前は」

「気が動転しておつたのじや。だからとつさに地面よ取りモチになれなどと叫んでしまつた。言葉が足りなかつた。おぬしの足元の地面、と言つべきじやつた

ぐつと、俺は唇をかんだ。

オヤジは情けなく目尻をたれ下げている。

その両側のバーニガールたちも似たような表情。泣きそうだ。

「まあ、これも死ぬまでの辛抱じや。そうすればここから開放され

る。別のところでは、「オヤジは暗然と言つた。「いつにもはやく死ねるよう、神に祈ろう」

「お前のぐだらない冗談はいいんだ。お前が神なんだろうが」「俺はがなり立てる。『神なら眞面目に考える。この窮状から脱する方法を』

「何も思いつかん」オヤジは逆ギレしてきた。「自分で考えろ」

「お前のせいでこうなったんじゃないか。ふざけるな。死に至るまでは苦しいに決つていい。このままいけば餓死だ。神が不注意で人を殺してもいいのか。よくないだろ。ダメだろ」

「そんなもん、関係ない。思いつかんもんは、思いつかん」ペッペつ佩つと、この距離で届くわけがないのにオヤジは俺めがけて唾を吐いてきた。

こんな醜行、小学生でもしゃしない。コイツは本当に神様なのだろうかと、また俺の頭の中に疑念が湧いてきた。

いちおう不思議な能力を有しているのだから、人間ではない。人間ならば最初のあの空中浮遊の時点で……。

「あつ」と、俺は声を上げた。「お前、空中浮遊をしろ。空中浮遊を」

「それはやつて見せたではないか」オヤジは生氣のない半眼だ。「もう、なんだか疲れた。寝る」「おい、寝るな。あの空中浮遊は指を弾かなくとも出来るよな。たしか弾かなかつたはずだ。答える」

「あれは、念じるだけでいい」

「だったら今すぐやれ。空中に浮き上がって、それから俺たちを助ける」

「あつ」今度はオヤジが声を上げた。「なるほど。その手があつたか。うむ。おぬしは賢いぞ。よし、ならば」

めりめりめりと剥離音を立てて、オヤジが宙に浮かび始めた。体と地面とをつなぐ取りモチの糸がぶちぶち千切れていき、完全な自由の身となるやいなや瞬く間にほるか一メートルほどの高みへと達する。

オヤジは上空から俺に手を振った。破顔一笑だ。

「おぬしらもこい」 そう言つなり、俺とバーニガールの一人も浮び始める。

俺の靴が脱げ、つづいてズボンの膝が破れた。下半身から浮き上がつたのだ。

残りは両の手。逆立ちの状態である。

「ぎやああ。痛い痛い」 激痛が走つた。目に見えぬ物凄い力で上へ引っ張られているのだ。俺の掌の皮膚が剥がれるのが先か、取りモチが切れるのが先かといった感じである。「魔法で助ける。地面を元に戻せ」

鼻歌をうたいながら上半身でリズムを刻んでのりのりのオヤジ。俺の言葉など耳に入らぬといったふうだが、本当は聞こえているに違いない。自分が空中浮遊をする際に痛かつたから、俺も同じ目に合せようとしているのだろう。

ところどころに取りモチの付着したオヤジの体は赤く腫れていた。

「うぎやああ」

そしてぶちぶちぶちと取りモチの干切れる音がして、俺はオヤジの横へ至る。

慌てて掌を確認した。もしかしたら皮膚や肉が剥がれたかも知れないと思つていたが、幸いにも無事である。オヤジと同じく点々に取りモチが残つて赤く腫れているだけだ。

少し遅れてバーニガールの二人も飛んできた。頭と両の手足を地上に向かつてぐつたり垂らしている。レオタードと網タイツの前部が破けていて、半裸に近い。

正気に戻るとすぐに胸と局部を手で隠し、俺を軽蔑のまなざしで見つめてきた。

「俺のせいじゃない。コイツだ、コイツがやつたことじやないか」 オヤジを指差して訴えた。

しかし、バーニガールの二人はますます俺に対して軽蔑心を抱いたらしい。眉間に蹙む。濡れ衣だ。

「何でそういう対応なんだ。どんな理屈だ。衣装が破れたのは取りモチでだろ。それを作らせたのはオヤジだろ。オヤジのせいだろと、ぜんぜん難しくないことを噛んで含んでやつているそばから、またしても俺は目に見えぬ強い力で引っ張られた。横に引っ張られ続けた。「うわあああああ

飛行である。前方三メートルくらいのところにオヤジの尻があった。フンドシからは金玉がハミ出していた。

「楽しいなあ。楽しいなあ

「おい。この飛行には何の意味があるんだ。降ろせ、降ろせ、降ろせ。地面を元に戻してからゆっくり降ろせ

「楽しいなあ。楽しいなあ

無視だ。いや、これは本当に聞こえていないのかも知れない。オヤジを先頭にして俺、バーニガールたちの順で空中を旋回し続ける。地面ストレスレまできてまた上昇するあの芸当もセットだ。

「うわああああ。ぎゃああああ。やめろやめろ。降ろせええええ」だんだんとここがどこなのか、自分が何をやつているのかも分からなくなつてくる。頭の中に靄がかかつていく……。

## 脱出

「う、ううううん」気がつくと、俺は地面に横たわっていた。

さつそくオヤジの顔が目に飛び込んでくる。人工呼吸はされていない。オヤジも横になつて互いが向き合つたたちだ。

暗澹とした気持ちになつた。意識が戻つて目を開くまでのわずかな間、ここは生前に住んでいた自分の家のような錯覚があつたのである。二十四年の習慣であるう。

しかし、全て夢ではなかつたのだ。事故に遭つたことも、恐怖の空中浮遊も、オヤジに押し潰されての接吻も、バーニガールたちとの悶着も、ゲテモノ料理も、取りモチも、何もかも。

上半身を起こしてみるとオヤジの後ろでバーニガールの一人も寝息を立てていた。破けていたはずの衣装は俺の服やズボンと同じく元に戻つている。

地面も、だ。あの強力な取りモチはどこにもない。オヤジや俺やバーニガールたちに付着していたやつまでも。赤い腫れだけが少し残つていた。

「があああ。があああ」と、オヤジはイビキをかけて寝返りを打つ。あんぐりとした口の奥で喉チンコを震わせ、ヨダレの糸を引き、鼻水まで垂らしていやがる。なんたるアホ面。

俺はむかつとした。今までの経緯もあつて殴打の衝動に駆られたが、それをすんでのところで我慢した。

「もうコイツらと関わり合いになるのはヤメだ」かたわらに転がっていた靴を履き、黄金色の扉から外へ出る。「じゃあな。バーニガールたちと糞オヤジ

糞オヤジとはなかなか巧いことを言つた、などと心の中で自賛しながら扉を閉めた。お別れである。こんりんざい会つものか。

「こまま真っ直ぐだな、真っ直ぐ。最初に目覚めた場所は「二、三歩ほど進んで、あることに思い至つた。立ち止まる。「食べ物を

持つてくりやよかつたかな」

食べ物とはオヤジの排泄物のことではない。調味料だ。あれもいちらおうカロリーにはなる。まだ口に出来そうなやつが残っていた。床で混ざり合つていようが、嘔吐感を催すほどの味であらうがないよりはマシ。また腹が減る可能性は大なのだ。

俺はくるりと方向転換して、舌打ちした。「けつ。やつちまつた」黄金色の扉は閉まっている。自分で閉めたばかりだ。それが、いけなかつた。

黄金色の扉にはノブがついていない。さらに枠組みと扉の隙間さえもない。外からどうやって開ければいい」というのだろう。

ためしに押してみた。が、やはり開かない。

「しようがないな。ここから飲まず食わずで行くか」俺は諦めた。

「オヤジとバニーガールたちを起こして中から開けてもらつわけにはいかないし。そんなことしたら逆戻りだ。酷い目に合つてしまふ。キッチンで摂取したマヨネーズと醤油とサラダ油の混合調味料、あれのカロリーだけで頑張ろう。元の世界に帰れたらマトモな飯を腹いっぱい吃えるんだ。そうでなければ、餓死するのだが……。あの世で命掛けだな」

俺は黄金色の扉から遠ざかりつつ愚痴をたれる。

「だけど、なんで俺がこんな目に合わなきやならないんだ。車にはねられただけじゃないか。不注意ではあつたが、死んでしまったのはこっちの方だぞ。誰も巻き添えにはしていいないし」

だんだん腹が立ってきた。ここへやつてきてからというもの泣いたり怒つたりばかりで、ひとつも楽しいことなんかありやしない。まさに虐待。虐待につぐ虐待である。

生き返れるかどうかは分らないが、とにかくここからはいっこくもはやく脱出するよう努力しなければ。

「ん。なんかずっと向こうに光が見えてきたな」俺は歩きながら手庇をかざした。「なんだあれは」

自然と速足になる。それは、だんだんとかたちをとり始めてきた。

「あつ。扉ではないか。銀色に発光しているぞ」ついには駆け出した。希望の光である。あそこがあの世と現世をつなぐ扉かも知れないのだ。「やつたあ。やつたあ」

そこへ近づけば近づくほどに加速していった。陸上競技でなら世界記録を出していたことだらう。

「もうすぐだ。もうすぐだ」

しかし、いつたいこじまどうにつ仕組みになつてゐるのだ。俺が

あの銀色の扉はその中間地点くらいではないのか。あんなものは、ぜつたいになかった。

だいいち、あの世に扉がある意味も分からぬ。そんな教えを説く宗教があつただろうか。少なくとも俺は知らない。

神様のイメージもまるで違う。あのオヤジがそうだとするならば。罪もない者を虐げるのが神なのか。

いろんな疑問が湧いてきて、その答を考えているのひとつ  
俺は扉の前までやつてきた。

腹が痛い。

だが、ここは押せば開くことだって有り得る。開き戸と決めつけるのは早計だ

祈るような気持ちで手を伸していく。

「ひやあ」あやつゝ突き指をすると、ひやあが立った。勢いよく開いた扉かはたがあああああんと凄まじい音を立てて勢いよく開いた。

「はやく中に入つて」

覗いてみると、あの神を名乗るオヤジの姿。胡座を搔いて両側に  
バーニガールを従え、仏頂面で手招きしている。

俺は力ませにばたあああああんと扉を閉めた。ついでにビカ  
んどかんと蹴りも入れてやる。

「くそ。本当にこじはどうなつていやがるんだ」俺は肩をそびやか  
して大股に前へ前へと進んで行つた。「なんで銀色の扉の中にオヤ  
ジとバーニガールたちがいたんだ。先回りされた覚えは、ないぞ。  
こんなところで追い越されようものならすぐ気がつくに決つて  
いる。地下通路もあるのか。いや、魔法か」

振り返つてみると、あの銀色の扉は遙か彼方。  
歩きながら目を右や左にきょろきょろさせる。オヤジとバーニガ  
ールたちの姿はない。

感覚的にいつ俺が最初に目覚めた場所はこの辺りだつたのだろう。  
そう思った時、またもや前方に光が現われた。

「ん。今度のは赤い扉か」俺は悪い予感に襲われながらも駆け出  
した。

他に行く当てなんてない。あれに望みを託すしかないのだ。

「はあはあはあ

そして息も絶えだえそこへ到着すると、図つたかのよつて扉は中  
からばたあああああんと開いた。

「おい。はやく」

俺はオヤジの言葉を最後まで聞かずに扉をばたあああああんと  
閉めた。

ばたあああああん、ばたあああああん、どかんどかん、ばた  
あああああん、ばたあああああんとやかましいこと、この上な  
い。耳鳴りがする。

## 再会

それからも一定の間隔を置いて次々と扉は現れた。

黒い扉や白い扉、青い扉や緑の扉、茶色い扉もあればピンクの扉もあつた。およそ考えつく限りの色の扉だ。

自分からその数々の色の扉を開けたことは、ただの一度もない。

扉は俺が近づくとかならず中から勝手に開いた。

そこにはオヤジとバーニガールたちがいた。

「おい、はやく中に入つてこんか」第一声はこれである。

拒否し続けた。今までの経験で中へ入ればまたヒドイ目に合ひうのは、明らかだから。

しかし、忍耐にも限度というものがある。体力もなくなつてきた。神を名乗るオヤジは飽きてきたのだろう、扉の中で変顔をするようになつた。

べろりと舌を出して耳朶を引っ張つたり、頬を膨らませて黒目と黒目を寄せ合つたり、瞼を押して裏側で赤い小さなゴブを作つたり。負けのみえた根比べ。けつきよく俺には脱出方法が分からぬ。この世界を律しているのがあのオヤジなのは、間違いないのだろう。ここにいるのはオヤジとバーニガールたちと俺だけだ。

ここ、つまりあの世をぐるっと一周したのか何なのか久方ぶりに黄金色の扉が現れた時、俺は中へ入る覚悟を決めた。

「おい、はやく」のオヤジの言葉に従つた。

「元の世界に戻せ。俺を」オヤジの目の前まで行つて单刀直入に切り出す。よけいな話をする気は、毛頭ない。

胡座を搔いたオヤジは両の手の指先を頭頂につけ、腕で輪つかを作つている。白田を剥いていた。まだ変顔でウケを取れると信じているのか。

俺はオヤジの額を軽くこづく。

ダルマの如くごろんと後ろにひっくり返れるオヤジ。それでも変

顔と腕の輪っかは崩さない。粘り続ける。

バニー・ガールたちのほうが痺れを切らして、右と左からオヤジを抱き起こす。

「ごほんとひとつ咳いてオヤジは頬を赤く染めた。ギャグがすべつたことを照れているのだろう。

「あん、何だつてえ」おかしなアクセントのソプラノ調できいてきた。

ウケ狙いを諦めていないらしい。耳まで真っ赤かだ。

俺も上目づかいで鼻にシワを寄せ、歯を剥き出した変顔で対抗する。これはウケ狙いではない。相手を愚弄した表情のつもり。不快感でオヤジがくだらないギャグを止めると思ったのだ。人のふりみて、我がふり直せ。

が、意に相違してオヤジは爆笑した。

「うわはははははは」

俺はオヤジに殴りかかって行つた。

「元の世界に戻せ、戻せ、戻せ」

これでいつたい何度も戦いになるのだろう。覚えていない。俺とオヤジは地面の上をくんずぼぐれつ揉みくちやになつて暴れまくつた。

バニー・ガールたちも参戦してくる。もはや乱闘だ。俺が誰を殴つたのか、誰に殴られたのか判然としない。

疲れが怒りを上回つて俺たちの戦いは終了した。

四人が車座になつて喘ぐ。バニー・ガールの一人は鼻で「ふうううん、ふうううん」とつていいる。

殴り合いをしている時には脳内で分泌されるアドレナリンの影響で感じなかつたのだが、今は体中のあちこちが痛い。

「はあはあはあ」俺はオヤジを睨みつけた。

「はあはあはあ」と、オヤジはつつ向いたまま、俺の視線にも気がついていない。

次に俺はバニー・ガールたちを睨みつける。「はあはあはあ

田の周りに青痣を作ったバーニガールの一人は俺の視線に気づいて、びくっとした。瞳に怯えの色が浮かんで、胸と股を手で覆う。俺のはあはあはを性的興奮と受け取つたのだろう。

俺はがくつとうなだれた。

「なあ、本当に頼むよ」オヤジの側までいざり寄つて、土下座した。「はあはあはあ」と、荒い息づかいが聞こえてくる。顔を上げると遅ればせながらオヤジが俺を睨み返していた。「はあはあはあ」

鳥肌が立つ。まるで俺に発情しているみたいだ。これは二度目か。四つん這いで俺に迫つてきた時と合わせて。

バーニガールたちの気持ちがよく分かつた。

「はあはあはあ」オヤジは舌舐めずりする。

横座りで妙なしなを作つて、俺にウインクしてきた。唇を尖らせる。

俺は殴りかかつて行つた。

「ギヤグなのか本気なのか、何なんだ。お前はああ

すかさずバーニガールたちがこれに加わつた。またしても乱闘だ。彼らは半笑いである。楽しんでいるらしい。

俺ひとりが馬鹿をみているようだ。

乱闘直後の乱闘。体力が続かない。俺たちはすぐ大の字になつて寝そべつた。

「真面目に話し合おう。大人になろう。もう暴力も悪ふざけも止めにして」俺は苦しい息の下から言った。

「ワシはいつだって真面目じゃ」バーニガールたちに怪我の具合をチェックさせながらオヤジは答えた。

側頭部の髪の毛をぐしゃぐしゃに乱した青タンだらけの顔で、鼻血まで流している。それでながら厳とした表情なのだ。

ギャップがあつて、これがいちばん面白い。ほんらいなら腹を抱えて笑つていたはずである。

が、今はそれどころじゃない。そんな余裕はない。ここから脱出

しなければ。

「なら、現世へ戻るにはどうしたらいいんだ。教えてくれ。戻れる  
んだったら、何でもする。ウンコ膿カレーを百杯食つたつていい」  
「何でもするじゃと」オヤジの目がきらりと光つた。

嫌な予感がした。

「何でも、つてのは言い過ぎた。たいがいのことはする」俺は急いで訂正した。

このオヤジのことである。何を言ひ出すか分からぬ。物理的にも精神的にも不可能な交換条件を持ち出しかねない。非常識な奴なのだ。

オヤジは言つ。

「バニーたちとの勝負に勝てば、元の世界へ戻してやつてもいい」「勝負、だつてえ」

ぱつと頭にかけっこが思い浮かんだ。童話のウサギと亀である。俺は亀じゃないが。

「かけっこではないぞ」心の中を読んだのかどうなのか、オヤジは間髪いれずに俺の連想を否定した。「まあ、スポーツではあるがの」「何のスポーツだ」俺は勢い込んだ。

女と肉体的に競い合うのなら、こっちに分がある。

バニーガールたちの身長体重は平均的な女性のそれだ。むしろ胸やお尻がグラマラスなぶん、普通の女性よりは運動に不向きであろう。今まで動きを見てきたが、きっと特別な運動もやっていない。目立った筋肉もない。

勝てる。一対一でも。

「アイスホッケーのようなスポーツじゃ」オヤジは足元を指差した。  
「ほい」

ぼわんと煙が立ち昇る。

そこから木製のステイックが現れた。なるほど、形も大きさもアイスホッケーの道具にそっくりだ。先のほうが「字」に曲がっている。つづいて遠くを指差すオヤジ。「いですよ」

向こうでも煙と共に何かが現れた。

「なんだ、あれは」俺は爪先立て目を細める。

「このスポーツに使う「ゴールとボールじゃ」

煙が薄まつてくると、赤と青の一いつの「ゴールが確認できた。その中央に白線が引かれてゴム製なのだろう直径七センチほどのボールが置かれてある。

たしかこの魔法は指を弾かないと使えないのではなかつたか、などとも思つたのだが、もうそれはどうでもいい。

このオヤジのことだから、そこを突っ込んだらまた何かできとうな応答をするに決まつている。今、出来るようになつただの何だの。

オヤジのルール説明に聞き入る。

「赤いゴールがバーーで青いゴールがおぬしじゃ。白線を挟んで対峙し、笛の音で試合を始める。そのステイックで相手のゴールにボールを叩き込んだら一点。ゴールを決めたら白線に戻つて笛の音で試合再開。これの繰り返しじゃ。試合は一時間でたくさん点を取つたほうの勝利。かんたんじやろ」

「たつたそれだけか」俺は胡散臭さげにたずねた。

「そうじや。ただし」オヤジは横目に俺を見据える。「男と女。しかも初心者同士。ハンディー・キヤップはつけさせてもらひつ。おぬしは一人でバーーは二人じや」

いいな、というように俺を正視してきた。  
俺に否応はない。

「やるしかないんだろ。やつて勝たなきや現世には戻れないんだろ」  
オヤジは黙つて尊大な調子で頷いた。

「では、さっそく始めるとするかの」ステイックを手にバーーガールたちを従え、白線へ向かつて歩き出す。

「カロリーの補給をさせてくれ。ちょっと待つてくれ」俺はそう叫んでキッチンへと駆ける。

腹がへつては戦ができない。ドアを開けると、あの混合調味料が残されていた。

「うえつ」俺はそれを貪り舐めた。

この勝負には何がなんでも勝たなければならぬ。最後のチャンスかも知れないので。吐き気に耐えてでも体力の回復をしなければ。そして俺はキッチンを出て、オヤジたちのところへ歩きながら考える。腹をさすつて。食後すぐに走るのは無理だというふうを装い。キッチンへ行つたのは、作戦を練るためにもあつたのだ。

まず、今の状態ならバーーガールたちと足で競つて負けるわけがない。自信がある。

ならばステイックで下手にドリブルはしないほうがいいだろう。笛が鳴つたら力いっぱいボールを叩いてダッシュである。先にボ-

ルを叩けば、あとはかけっこ。足の速さが勝敗を決する。一対一とか関係ない。

バニー・ガールたちが先にボールを叩き、そのままゴールすることもほほり得ない。ゴールの大きさはアイスホッケーのものと同じくらいであり、白線からは五十メートル以上の距離がある。巧く狙いが定められない。ボールの勢いも失速するだろう。やはりかけっこで俺が勝つ。

「おい、はやくせんか」イラ立たしげに足摺りしていたオヤジがそう怒鳴った。

「ああ、満腹満腹。すまんすまん」白線を挟んでバニー・ガールたちと対峙する。

俺は、笑顔になった。やはりボールはゴム製だ。  
初心者の女にドリブルの技術があるわけないが、バスは偶然にも通るかも知れない。そうなった場合はキーパーだ。地面に膝をついてのガツツポーズでほとんどの空間が埋められる。  
そう、ボールはゴム製。恐怖心はまったくない。僅かな空間に意識を集中して反応も出来る。

バニー・ガールたちが点を取るのは万にひとつのことだ。

「うひひひ」俺は声に出して笑った。

しかめっ面になるバニー・ガールたち。いぶかしげな表情のオヤジ。「ほれ、これを持て」俺にステイックを手渡しながら、オヤジは諫める。「よからぬことを考えてはおらんだろうな。ちゃんとルールに則って、正々堂々と勝負せねばならんぞ」

「よからぬことなんて考えちゃいない。言われなくてもルールは守る」

嘘ではない。ルール違反ではなく、これは作戦だ。わざとゆっくり歩いていたのは少し卑怯かも知れないが。

「ならば、よいが」オヤジは疑いの残る目まま笛をくわえた。腕を振り上げ、降り下ろす。「ぴいいいいい」

と同時に、左側のバーチガールがステイックで俺の頭頂部を思い切りぶん殴った。

俺のほうが先にボールを叩いていたのに、何もすることが出来やしない。その場にぶつ倒れた。

足音が前に遠ざかつて行つて、やがて俺の横を通り過ぎる。

ふたたび「ピィィィィィィ」、笛の音。バーチガールたちがゴールを決めたらしい。

今度はゆつくりと足音が近づいてきた。

「ほれ、何をしてある。起きんか」

頭を擦りながら顔を上げると、オヤジとバーチガールたちの三人が俺を見おろしていた。彼らの周りにちかちかと星の幻像が瞬いている。

俺はがなり立てた。

「これはどういうことだ。いきなりステイックで殴られた。正々堂々と勝負するんじゃなかつたのか。卑怯じやないか。ルール違反じゃないか」

「ワシはステイックで相手を殴つてはいかん、などとひとことも言つとらん」

「ぐきつ」俺は歯ぎしりした。抗議の言葉を飲み込む。

なるほど、確かにひとことも言つていない。俺が甘かつた。オヤジの非常識さを完璧には理解しきれていなかつた。

スポーツの概念を捨てるべきなのだ。いや、格闘技もスポーツかならばこれは格闘技の要素を含んだスポーツだ。

「よし分かつた」俺は立ち上がる。

先に狙うはボールではなく、バーチガールたち。バーチガールの二人を足腰立たなくなるほど叩きのめしてやる。

笛が鳴る。

「うらああああああ。死ねええ」俺はバーニガールたちの側頭部めがけステイックを右から左に横払いした。

が、警戒されていたのだろう。バーニガールたちは笛の音とともに後ろへぴょんと飛び退いた。攻撃をあっさりかわされた。

怒りまかせにステイックを振った勢いで俺はぐるぐるぐるぐる空回り。

その隙にバーニガールのひとりが白線上のボールを叩く。  
「うぎやああ」よろめきつつも走り出し、十数メートルほどとのことでようやく平行感覚が戻ってきた。

ボールに追いつく。ゴールはされていない。ゴールとボールとの間はほんの一、三十センチ。あぶなかつた。

やはり女ごときに脚力で負けるわけがない。目が回っていても、俺は「敵のゴールを振り返る。

バーニガールが一人がかりでその自分らの赤いゴールを持ち上げ、地面に叩きつけているところだった。

ばらばらになつた木製のゴールに瓶の液体をかけ、ライターで火をつけた。めらめらと燃え上がった。

「何をしてるんだあああ」俺はボールを放つたらかしてステイックを高くかざし、バーニガールたちめがけ駆け出した。

逃げ出すバーニガールたち。

笛が鳴つた。「ぴぴいい

オヤジが俺に武者振りついてくる。

「白線のところへ戻らんか」

オヤジが指差すほうを見ると、俺の青いゴールにボールが転がっている。駆け出した時の風圧か、あるいは我知らずボールを蹴飛ばしてしまつたのか。

まあ、そんなことよりもバーニガールたちの赤いゴールである。

俺はオヤジに食つてかかつた。

「これから先、どうやって俺はゴールを決めればいいんだ。永遠に無理じやないか。これじゃあ、競技じたいが成り立たない

オヤジはやれやれといった感じで頭を振る。

「ゴールを燃やしてならんと、誰が言つた。バーナーたちは賢い。これなら点を取られる心配がない」

「うわあああ「俺は髪の毛をかきむしりながら、その場にうずくま

つた。「ゴールを出せ。また魔法で出せ」

ステイックで地面をばしばし叩いた。「字型の部分がぽきりと折れてしまつた。

オヤジが腰を屈めてそれを拾う。

「出来ん。ゴールは一度きりしか出せん」白線のところへ戻つて行く。「まあ、試合再開じゃ」

バーナーガールたちがやつてくると、オヤジは笛をくわえた。

俺も白線のところへ戻つて行く。

「このまま勝負を続けて、俺に勝ち田はあるのか」「うらめしげな眼差しをオヤジに向けた。

「ない」オヤジはあつけらかんと答えた。

「だったら何の意味があるんだ。試合を続けること」。もう決着はついているだろ」「

「ルールじやからの。最初に説明したはずじや。このスポーツの試合は一時間。残り一時間三十二分ある」

「どうやっても勝つ」との出来ないスポーツを俺はあと一時間三十分もやらなきゃならないのか」とうとう我慢出来なくなつて俺はオヤジの首から下げる笛の紐を捻り上げてしまつた。

「よせんか」オヤジは俺を突き離す。「おぬしが大人になろうと提案したばかりじやろ。それに何もルールに反しておらん。言いがかりの八つ当たり。勝手にルールを誤解しあつてからに。そつじやろ。責めるべきは自分自身じや。勝てないスポーツでもやらなきゃならん。さあ、これを持て」

折れたステイックの先を俺に差し出した。

俺はそれを受け取る。あとは白線の前に膝を抱えてバーナーガールたちがゴールを決めるのを黙然と見続けた。

試合開始から一時間が経つたのだろう。オヤジは時計の確認もなしに笛を吹き、高らかに告げる。

「三十九対〇。バーチたちの勝ち」

俺は腰を上げた。「次の勝負もお願いしていいかな。現世に戻りたい。ここは嫌だ。ぜつたい、ぜつたい、ぜつたいに嫌だ」「その前に」と、オヤジは勝ち誇った顔のバーチガールたちと領き合つ。「罰ゲームじやあ」

いつせいに三人が踊りかかってきた。

「な、何をするんだあ」

バーチガールたちが右と左から俺の腕を固めて寝つ転がり、オヤジは両足を掴んで広げる。踵が俺の股関に当たられた。

「電気アンマージやあああ

今どきこんなことをする奴もいるんだなあと懐かしさを覚えたのも束の間、すぐに激痛が走つた。

「つぎやあああ

」のオヤジ、本氣である。「つひひひひつ

バーチガールたちも実に愉快そつ。

「いい加減にしろおおお」俺は、声を引き絞つた。

オヤジは手を離す。俺の訴えを聞き入れたわけではなく、ただたんに疲れたからだらう。

地面上にぺたんと尻をつき、息を切らせる。「はあはあはあ

バーチガールの二人も地面に伸びて鼻で荒い息をつく。

「ふうううん。ふうううん」

「ふうううん。ふうううん」

油汗を浮かべて上半身を起こしてみると、オヤジが横座りで妙な

しなを作つてウインクしてきた。唇を尖らせる。

「勝負、して貰えるよな。罰ゲームを受けたんだ。そんな話、聞いていなかつたのに」押された股関はじんじんと熱を持つて腫れている。

「いいわ。じゃあ、次の勝負はジャンケンにしましよう」

「ジャンケン、だと」俺はオヤジに訊き返す。

「そうよ、ジャンケンよ。ジャンケンも知らないの」

「グーはチョキに、チョキはパーに、そしてパーはグーに勝つやつなら知つていい」「いちおつるーるの確認をしておく。このオヤジは油断がならない。

「そうよ。それよ」手をぱんと打ち鳴らして、オヤジはまた俺にウインクしてきた。今回のオカマキヤラはいつまで続ける気なのだろう。ウザい。「先に三回勝てばいいわ。それで決まりよ。さあ、バーニーの中からひとり選んでちょうだい」

「よし、分かった」俺は立ち上がる。「コイツだ」

てきとうに指差した。運勝負なのだから、相手は誰でもいい。

「それじゃあ、バーニーちゃんも立ち上がって。正々堂々と勝負するのよ。」オヤジは言つ。「最初は、グー」

俺とバーニーガールは勢いよく手を出す。俺はグーで、バーニーガールはパーだった。

「まずはバーニーちゃんの一勝ね」

俺は、ぶちキレた。

「最初はグーだつて言つただろうがあああ」

「ただの掛け声よ。ただの掛け声」もう、とオヤジは俺の肩を軽く叩く。「だつてルールはチョキがパーに、パーがグーに、グーはチヨキに」

「すまん。そうだつたな」片頬をぴくぴくさせながら俺はオヤジの説明を止めた。「第一回戦を頼む」

「いいわ。じゃあ、第二回戦ね」と、ひと呼吸置くオヤジ。「最初は、グー」

俺はバーニーガールを目潰しするような感じで鋭くチョキを出した。それを見届けてから、ゆっくりとグーを出すバーニーガール。後出しだ。

「バーニーちゃんの一勝ね」オヤジは舐めた指で掌に何やら書く仕草をした。

「なんでもアリだな」出したままでチョキの形の手がぶるぶる震える。

「なんでもアリじゃないわよ。ちゃんとルールに則つて」

「第三回戦だ。頼む」オヤジの言葉を途中で遮った。「さあ。はやくしろ」

怪訝な表情で顔を見合るオヤジとバーチガール。小首を傾げ、肩をすくめ、息もぴたりにくいつと両掌を突き上げた。

これにはさすがに殺意を覚えた。狂ったように自分の骨盤の辺りを乱打して必死でその衝動を押さえつける。

「はやくしろと、言ってるだろうが。聞こえないのか」

「もう、せつかちねえ」オヤジは微苦笑した。「じゃあ、いくわよ。

最初はグー

とにかく先に出せなきゃ負けない。このジャンケンの必勝法だ。

俺は後ろ手を組む。

が、それはバーチガールも同じこと。後ろ手を組んでいる。いつもこうにジャンケンをする様子がない。

「はやく出せ」

バーチガールは首を横に振った。

俺はオヤジに向き直った。

「次の勝負を頼む。ジャンケンはおしまいだ」

「なんじゃ。だらしがないのう。勝負を放棄するつもりか」オカマキヤラをやめてオヤジが言つ。

「あ、ああ」俺は思わず手をほどいてしまった。「これじゃあ、しかたないだろ」

くやしさに握り拳を固めた。

オヤジが、叫んだ。「バーチの三勝目。勝負あり。罰ゲームじゃあああ」

どうやら俺の握り拳に対してバーチガールがパーを出したらしい。

俺は電気アンマの餌食となつた。怒りも殺意も通り越し、情けなさでいっぱいになつた。ぼろぼろと涙が溢れ、頬を伝つ。

「もう次の勝負はない。これが最後じゃった」はあはあ息を喘がせながらオヤジは胡座を搔き、額の汗を拭つた。

## 理由

「なあ、何でここには俺とお前らしかいないんだ」地面で大の字となつたまま俺は素朴な疑問を口にした。「おかしいじゃないか。現世でこれまでに大勢の人間が死んでる。なのに、誰もいない。俺だけがここでヒドイ目に合つている」

不条理かつ理不尽だ。涙が止まらない。

「他の者たちはそれぞれ現世での行いに応じたところにある。あの世は、ここだけではない」

「現世での行いに応じたところだつてえ。ここが俺にとつてそりだと言つのか。俺が現世で、何をした」

「悪い行いじや。むろん一十四年も生きていれば良い行いもあることはあつた。が、それは微々たるもの。おぬしの場合、悪い行いのほうが圧倒的じやつた」オヤジは久しぶりに恐怖堂々たる険しい表情となつた。

「悪い行いだと。それは何だ。具体的に言つてみろ」怒りの感情がぶり返してきた。

「これほどヒドイ目に合つわわれはない。そんな悪事は、働いていない。ぜつたいに」

俺はオヤジに抗議してから、また泣き出した。号泣である。情緒が不安定だ。

耳にオヤジの声が降つてくる。

「いや、おぬしはこのような目に合つだけのことをやつた」

「やつてない。ぜつたいに、ぜつたいに、ぜつたいに、ぜつたいだ」泣きながらかぶりを振つた。「やつてない、やつてない、やつてない」

「やつておる」オヤジは恫喝する。「具体的に言つてやるが」「言つてみろ。何をした。俺は」泣き叫んだ。

「シコつた」

「うわああああああ」そのひとことで俺の中の何かがぶつりと音を

立てて切れた。「シコつたら悪いのか。罰を受けなきや、ならないのか」「違う。その後が問題なのじゃ」危険を察したオヤジは素早く俺から、「二歩後ろへ退いた。

握り拳で立ち上がった俺はバーニガールの一人に羽交い締めされ、いつそうオヤジから引き離される。

「シコつた後、おぬしは実家の一階にある自室から裏の畠へ精液まみれのティッシュを投げ捨てておつたな」安全な距離からオヤジは言つ。「ほとんど毎日じや。日に四、五回捨てることもあった。猿かおぬしは。年に平均四百七十三回捨てておつた。シコるのを覚えた小学校六年の三学期から死ぬまでの一十四才までに。十一年間もじや。その間、畠の持ち主はえらい迷惑をしておつた。捨てられているティッシュの地点から、ほぼ間違いなくおぬしが犯人と推測はしてあつた。しかし、証拠がない。いつもおぬしは部屋の電気を消して夜中にティッシュを捨てておつたから目撃できぬ。おぬしのところは田舎で街灯も届かず、そのうえ畠の持ち主である老人は視力が低い。近所づき合いだつてある。下手に嫌疑をかけて関係を悪くしたくはないからう。犯人であるおぬしを捕まえることなく、十二年間もイカ臭いティッシュを回集し続けたのじゃ。なぜあのような行いをした。馬鹿め」

「面倒くさかつたんだよ」指摘をされると恥ずかしいものだ。このオヤジに一部始終を見られていたのか。「二階の自分の部屋で工口本をオカズにシコつて、一階のトイレへティッシュを流しに行くのが。ゴミ箱に捨てたら臭いで親とか友達とかにバレるし。だけどたつたそれだけの理由で俺はこんなヒドイ目に合わなくちゃならないのか。釣り合いが取れてないだろ。明らかに」

かつかつ、かつかつと顔面を熱く火照らせながら俺はバーニガールたちを振りほどいた。

もしかしてコイツらにもあれの現場を見られていたのだろうか。目も合わせられない。

「それだけではないぞ。他にもいろいろやつた。罪なことを「オヤジはもうよいといったふうに頷いて、バーニガールの二人を側へ手招きした。

「何だ。他に何をやつた。俺は「出来るだけバーニガールたちを見ないようにしながら俺は訊いた。

「電信柱の選挙のポスターにマジックペンで鼻毛やホクロを描いたし、友達から借りたゲームを返さなかつたし、酔つ払つて飲み屋の立て看板に小便をぶつかげたし、燃える「ゴミ」と燃えない「ゴミ」をいっしょにして出したし、人の飼い猫を蹴飛ばしてウサ晴らししたし、それからえつと」

たまらず俺は半分悲鳴のような、半分怒号のような、そんな声を張り上げた。

「つまらん理由ばかりじやないかああ

「何じや。つまらんとは「オヤジは心外そうに眉間に蹙らせた。

「ぜんぶだ。ぜんぶだ。罪と呼べるようなものは、ひとつもない」

「いや、おぬしの言動は人に迷惑をかけておる」ピシャリとオヤジ。

「それすなわち罪なのじや」

「誰でもやつているだろ。それくらいは」俺は顔中を口にして喚き立てる。「そんなことすらやつていないと云つなら、よほどの聖人君子だ。俺は普通だ」

「普通、とな。多くの者がやつてることなら何でも許されるのかのう。そうではないじやろ」

「何でも許されるとは言つてないだろ。ここまでヒドイ目に合つほどのことを俺はやつていない、つてことだ。何度も繰り返すが」

「たしか中学に入ったばかりの頃」オヤジは片手で目を覆い嘆いた。「バスに乗つて小学生料金を払つたこともあつたな。中学生は大人料金、小学生は子供料金じやから。金額が倍も違つうから」

俺は地団駄を踏んだ。

「だからたいした罪じやないだろ。お前の言つてることは。どれもこれもぜんぶ」

「みんながあぬしと同じ考え方ならば、一大事じゃぞ。大人がみな

子供料金しか払わなかつたらバス会社は潰れる。社員は路頭に迷う」

「中学へ入つたばかりの頃に、ほんの数回しただけだ。だいいちそ

の理屈でいつたら何でも大事になつてしまふ。みんながみんな立ち

読みで済ませたら書店は潰れる。働いていた奴らは路頭に迷う」

「悪いことに変わりはないんじやがのう。罪なことに」オヤジは鼻でふんと笑つた。「では、おぬしがここへやつってきたのはどうして

じゃ。死因は、何じや」

「車にはねられたんだ。赤信号に気づかなかつた。不注意だ。それが、そんなにいけないことなのか」俺は激しく抗弁する。「損をしたのは俺だ。痛い思いをしてこんなところにきてしまつた。周りの奴らは無事だつたはず」

「なぜ赤信号に気づかなかつたんじや」

「それはパチンコの新装開店が」と、俺はぎくつとした。我が意を得たとばかりにオヤジがにんまりする。

「そのパチンコをする金、母親の財布から盗んだじやう」

## 理由2

「そ、それは」目が泳いでしまつ。忘れていた。

「忘れていたのも、当然じゃ。おぬしにとつてそれは日常的なことじやからの。数日前の朝食を思い出せぬと同じこと」オヤジは俺に近づいてきて、顔を覗き込んだ。「働きもせず親の金を盗んでギヤンブルするのは、たいして悪いことじゃないのかのう。母親は数百円の時給でいくつも仕事を掛け持ちしておつたのに。夫、つまりはおぬしの父に死なれた後、家族を養うため必死じゃったのに。おぬし、妹、弟、四人家族か」

「それは、あれだ。反省している」俺はもじもじした。

「いいや。反省などしとらん。ワシに指摘されて仕方なくそう答えているだけじや」ペッとオヤジは唾を吐いた。唾棄である。「この親不幸者め。母親が親戚一同から借金してまで大学へ行かせたのに、けっきょくおぬしは辞めてしまつた。口クに勉強もせず遊びほうけた挙げ句に。バイトもしとらんかつたな。母親からの仕送りに頼つてばかりで」

「ぐつ」と、俺は唇を噛みしめた。

今まで誰かからそれを咎められたことはない。咎められる前に言い訳をして誤魔化していた。生前は、母親の苦労を当たり前だと思つていたのだ。

「自動車の免許を取りに行つたこともあつたな。就職するにしても何にしても必要だとかぬかして。その時も、必要以上に金を要求した。試験に落ちただとか、てきとうな理由をつけては。他にもたくさんある。嘘をつき、母親から金を受け取つたことが。遊びたいがためだけに。母親が汗水流して稼いだ金を」

「すまなかつた」俺は力なく呟く。

「こつして俺の母に対する仕打ちをひとつひとつ列挙されると、返す言葉もない。俺は、悪いことをした。オヤジの言つ通りだ。

「つむ。少しば心が変わってきたようじゃ。自分のしたことを悪いと認識してきた。ワシに指摘されてからではあるが」オヤジは蔑むような眼差しで頷く。

「俺がここでこんな目に合ひのば、そういうわけなのか」「母親ばかりではない」

もはやオヤジが心を読んでくることに何の驚きもない。コイツは神か、そうでなくとも超越的な存在。俺のしてきたことを全て分かっている。「おぬし、近所の個人商店で万引きもしておつたろう。仲間を誘つて。高校生の頃」

俺はびっくりと背筋を伸ばした。人間、自分にとつて都合の悪いことはやはり忘れてしまうものらしい。正確には無意識の層に追いやつてしまふものなのだろう。

オヤジに言われるまで、意識の層にはまったくなかつた。思い出した。

「あのおばあちゃん、可哀想になあ。ひとりで頑張つて店を切り盛りしておつたのに」オヤジは涙を浮かべて、鼻をすする。

「あのおばあちゃんの死因は、老衰なんだろ」俺はおどおどしながら訊く。

「老衰じや。しかし」オヤジの涙目に角が立つた。「おぬしらの行いが死期を早めたのは、間違いない。非常なストレス。心労。小さな個人商店で毎日のように万引きをされたら死活問題じや。実際、あの店は潰れただじやる。おぬしらのせいじや」

それは俺たちも薄々気づいてはいた。ただたんに認めたくなかっただけだ。

万引きは遊び感覚。遊びで人が死ぬわけない、と。

オヤジは続ける。

「他の誰かもやるからいいと、あの時のおぬしはそう思つておつたな。逆の立場でおぬしが物を盗まれたらどんな気持ちになるかも考えず。大馬鹿者め。あのおばあちゃんは万引きを見つけたら口で注意するだけじゃつた。警察に通報せんかつた。学校で問題になつた

ら若者の将来が駄目になるかも知れん、と。その想い遣りにつけ込んでおつた」

「これも、図星だ。何の罰も受けないのをいいことにつけ上がつていた。

卑怯者である。大馬鹿者だ。俺は。

「在籍していた少年野球チームでは下級生に体罰を加えてもいた。暇潰しに。練習の時の声が小さいとか何とか因縁をつけて。何人かはチームを辞めてしまったな。一度と野球をしなくなつた子もある。トラウマになつて。才能があつたのに。付き合つ寸前まで行つた男女の仲を裂いたのは大学の時か。妬みから。おぬしは妬みの感情を自覚しておらなんだが。笑いながら、『冗談。ぼくそれぞれの悪い噂を流しておつた。あれさえなければ一人は愛し合い、結婚し、素晴らしい人生を送れるはずじゃつたのに。人生が狂つた。狂わされた。人間不信になつてしまふた。おぬしのせいで。あとは満員電車で屁をこいたこともある。知らんふりしあつてからに。あれは臭かつた』

最後のひとつでまた小さな悪に戻つたような気もしたが、罪は罪である。オヤジは順不同に並べていつてるだけなのだろう。俺の悪行の暴露が時間軸に沿つていないことからもそれはうかがえる。子供の頃の悪さから大人の頃の悪さに行つて、また子供の頃の悪さに戻つたり。

まあ、とにかく俺は母親に対する悪行の指摘からは本当に反省していく。今までその悪さに気づかなかつたのは自分自身を正当化するのが巧かつたからだろう。現世では少しの罪悪感もなく生きていた。

オヤジはどごめどばかりに畳み掛けてくる。

「おぬし、女の子をイジメておつたな。名前はあえて言わん。同じクラスで、背が低い少し太つた娘」

あつと、俺は声を上げた。次々に記憶が蘇っていく。

「そりじゃ。その娘じや」オヤジは爆発しそうな憤怒を堪えるかのように奥歯をぎしりと軋ませた。「何も悪いことなどしていなかつたのになあ。あの娘。見た目を理由にイジメられた」

オヤジから剣呑な雰囲気が漂っている。

俺は何をされてもいいと思った。それだけのことをしたのだ。半殺しにされたって文句は言えない。

宙の一点を茫然と見つめる。

「やることなすこと全てを貶され、あることないと言い触らされ、時には軽い暴力も振るわれた。おぬしが首謀者となつて。クラスの男子の半数以上が。おぬしらは、笑っていた。あの娘の心の痛みも分からずに」

「最低」と、バーチャルたちが言った。初めて耳にする一人の声だった。

言われるまでもない。俺は最低だ。人間のクズだ。

たしかに中学一年生の頃、俺は同じクラスの娘をイジメていた。あの頃は、イジメをしているなどという意識はまるでなかつた。

彼女を道化扱いして、「冗談のつもりだつた。時おり見せる悲しい顔に腹が立つたくらいだ。

「冗談で傷つくほうが悪いとさえ思つていた。道化とはみんなに笑われる存在、それ以外にアイデンティティーはないのだ、と。

本質はまるで違う。プロの道化は人に笑われているのではない。人を笑わせているのだ。

なにより道化とは自らが望んだ結果でなければならない。地位や

名誉や金銭のため。

俺は少しの見返りも与えず彼女にみんなから笑われることを強要した。嫌がつていようが何だろうがお構いなしに。

「これは間違いなくイジメだ。

「中学に入ってきたばかりの頃、あの娘は明るかった。おぬしは覚えていないじゃろうが。それがイジメで暗くなつてしまつた。純粋な娘じやつたからう。心に受ける傷は深い。小学校から上がつてきただばかりの子供である。まあ、おぬしらにされたことを思えばたいがいの者は暗くもなるう。深い傷が残る」

自らの精神を防衛するため巧く押さえられていたものが一気に噴出してくる。罪悪感。罪悪感。罪悪感。

「もう一度訊く、あのイジメの首謀者はおぬじやつたな」オヤジは俺をぎろりとねめつけた。

俺は黙つて頷いた。罪の意識に唇がふるふる震える。

「うむ」俺が事実を認めたことでオヤジはいくらか納得した様子だ。神妙な面持ちで円を描いて歩き始める。「まずおぬしらはあの娘の体つきを貶した。給食のおかわりをあの娘がした時、だから太るんだなどとからかつた。あの娘は給食をおかわりしなくなつた。それどころか最初に与えられた分まで残すようになつた。食べるとまた何か言われるに違ひないと、びくびくしておつたんじや」オヤジは喉の奥で痰をからませ俺に向かつて吐きかけ、止めた。

痰を吐きかけるにも値しないということなのだろう。その通りである。

「フォークダンスではおぬしらが大げさに騒ぎ立てた。あの娘と手をつなぐのは汚い汚い、と。あの娘は悲しそうにうつ向きながらフォークダンスの輪をぐるぐる回つておつたな。手を下げたまま。このようなイジメは、他にいくらでもある。しかもおぬしらはずる賢かつた。先生に注意されることはあるても、職員室へ呼び出されるようなことはなかつた。精神的な苦痛を与えるのがほとんどで、教師にはいき過ぎた冗談にしか見えんかった。肉体的なものはふざけた感じで執拗に肩を軽く叩くくらいじやつた。ブスだのデブだの悪口を言いながら。遠田には仲が良く映つたりもした。そもそも悪口じたい、どこからどこまでがイジメの領域に入るか微妙なもんでも

あるしな。たとえば親しい者に馬鹿だの不細工だの言つたと、そうでもない者に言つたとではぜんぜん違う。言われる者の心次第じゃ。おぬしらはあの娘が傷ついているのを分かつていながらやり続けた。またあの娘は先生に助けを求めなかつたし、人前で涙も流さんかつた。家では毎日泣いておつたが。つまりおぬしらは何のリスクもなくあの娘をイジメておつたのじや。まあ他の者たちは中学を卒業後、イジメたことを凄く後悔しておつたがの。それで罪が消えるというわけではないが。その罪に対する罰は、しつかり受けてもらうが。おぬしよりはマシなあの世で。周りで黙つて見ていた者たちも含め「この人、死ねばいいのに」と、俺を指差してバニー・ガールたち。俺はオヤジの足にしがみついた。

「あの娘に会つて謝りたい」俺は心の底からそう思つて言った。「ふたたび現世に生を受けることつて可能なんだろ。そういう教えを説く宗教は多いはずだ。今まで無神論者だったが、そうしてくれるのなら信じる。このままじゃ死んでも死にきれない。あの娘に出来るだけの罪ほろぼしがしたい」

「生き返つても、その望みは叶えられんぞ。ぜつたに」オヤジは断言した。

俺は戸惑つた。意味が、分からぬ。

オヤジは長大息する。

「あの娘は、死んだ。おぬしが車にはねられる前の日。自殺じやつた」

俺は、固まつた。

「原因はおぬし。おぬしらからイジメられてあの娘の人生にヒビが入り、そして、壊れた。優しい娘じやつたからのう。イジメられるのは自分が悪いからだと思つとつた。生きていることに罪悪感を持つて、ついには自ら命を断つた。苦しんで苦しんで、苦しみ抜いた末にじや」オヤジの目は凄まじい悲しみと怒りで真つ赤に充血している。その目で俺を睨んだ。

「死んだのなら、あの娘のいる場所を教えてくれ。連れて行つてくれ

れ「血の気が引いていく。俺は、目眩を起した。「それで罪を、償わってくれ」

「それはならぬ。だいいちおぬしと会つてもあの娘の心の傷は癒されん。悪化するだけじゃ。ますます自分を責める。あの娘は生前も死後も真に心優しき者なのじや。おぬしとは違つ「オヤジはこれまででいちばん大きな声を張り上げた。

「母や、その他の人たちにも謝りたい。罪ほろぼしがしたい「俺は悄然と言う。「俺のせいで不幸な思いをした全ての人々に「黙れ。自分で罪が償えるというその考え方じたいが、おこがましい「オヤジは一喝した。「おぬしは何も心配せんでいい。ぜんぶこつちが決める。ちゃんと因果応報にしてやるぞ」

「自分は、何をどうすればいいのですか。どうすれば全ての罪を償うことが出来るのですか」俺は敬語を使つた。

崩折れるようひざまづき、胸の前で手を握り合わせる。「かんたんな答じや「宙に浮かび上がり始めるオヤジ。

俺に向かつてぱちんと指を弾く。俺も宙に浮かび上がり始める。オヤジはフンドシから素早く金玉をハリ出させた。きっとこれまでの空中浮遊の時もバレンによつて自分でそつしていったのだらう。実際に手慣れたものである。

しかし、俺には怒りの感情などあるわけがない。オヤジの下に漂いながら次の言葉を待つ。

オヤジは俺を見おろした。口を開く。

「ずっと、ワシリとこよにあるんじや「不気味な笑みが浮かんだ。

「最低。死ねばいいのに」地上からバーチガールたちの声。

二人の顔にも不気味な笑みが浮かんでいる。

「言つとくがの、おぬしはヒドイ田に合つたヒドイ田に合つたと喰いておつたが、あんなの序の口。その無限倍数分ヒドイ田に合つてもうひつ。これからは、手加減なしじや

言つ終わると同時にオヤジと俺は空中を旋回した。

「うひひひひひひ」 オヤジは物凄い量の大便と小便をする。いつこうに止まる様子がない。

そのほとんどが俺に直撃していく。

ここはあの世だとオヤジの言葉が思い出された。自らを神だとも名乗つた。

このオヤジが神ならば、現世で人間が作り上げた概念とは相当にかけ離れている。  
しかし、死後の世界の概念のひとつは現世で人間が作り上げたものと同じだ。

概念のひとつ。 そう、ここは地獄。

地獄に俺はずつといっているのだ。オヤジと一人のバーチガールと俺だけのこの世界に……。

どんなにかかっても決して消えることのない罪を背負つて。

【完】

罪悪（後書き）

よろしければ感想をお願いします m(—)(—)m  
良かった点や、悪かった点など、お気軽にどうぞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8614b/>

---

あの世

2010年10月8日14時39分発行